

第1章 東京都江戸東京博物館 研究フォーラム

「浅草十二階に魅せられた男 ～喜多川周之コレクションの魅力～」

はじめに

東京都江戸東京博物館の都市歴史研究室では、2007年（平成19）度より喜多川周之コレクションについての調査研究を館の基盤研究として位置づけ、その成果として、2010年（平成22）3月、『喜多川周之コレクション』を刊行した。

また、喜多川周之コレクションは、当館にとって極めて貴重なコレクションであることから、調査報告書の出版だけでなく、多くの方々にその魅力を紹介するため、2010年（平成22）12月4日（土）、東京都江戸東京博物館ホールにおいて、研究フォーラム「浅草十二階に魅せられた男 ～喜多川周之コレクションの魅力～」を開催した。

この研究フォーラムでは、まず、はじめに、当館の学芸員の行吉正一が喜多川周之コレクションの概要を説明し、次に、喜多川周之氏と共に研究活動を行なわれた小木曾淑子氏に、生前の喜多川周之氏について語っていただいた。そして、『浅草十二階 塔の眺めと<近代>のまなざし』（2001）を出版された細馬宏通氏に、浅草十二階の絵葉書の魅力を紹介していただいた。最後に、当館の開館前から様ざまなご協力をいただいている佐藤健二氏に、民間学者としての喜多川周之氏について発表していただいた。

なお、この研究フォーラムの総合的な司会進行は、湯川説子が行った。

本章は、研究フォーラムの最後に行ったパネルディスカッションも含めて、それらの発表を記録したものである。

また、フォーラムを聞きにこられた方々には、凌雲閣についてご存知のことがあれば、教えていただきたいという調査票を配布し、いくつか興味深いことをお教えいただいた。

たとえば、次のような回答があった。「明治40年生まれの母は、栃木女高の修学旅行で凌雲閣にのぼった話をしていた。」また、「子供の頃に子供達が歌をうたっていた中に、十二階が出てきていた。“十二階はこわい～、こわいはおばけ～、おばけは消える～、消えるは電気～、電気は光る～。”」それぞれ、凌雲閣の明暗を伝えるエピソードであろう。ただ、このように凌雲閣について直接ご存知の方はやはり少なく、凌雲閣についての記憶が人々の中にすでに残っていないことも事実である。凌雲閣を伝える喜多川周之コレクションは、ますます、その価値を増すものと思われる。